フィレンツェ大聖堂

ルネサンスの薫り高き

フィレンツェを征く

「花の都」の名に恥じぬ都市として成長し
一流芸術家たちが集い、イタリア・ルネサンス文化が
隆盛をきわめた古都フィレンツェ。
メディチ家という偉大なる支援者との深いかかわりについては
先々号で既にお伝えしたとおりだ。
今号では、そのフィレンツェの尽きぬ魅力を
引き続きご紹介することにしたい。

時代を越えた輝きをたたえる都市

メディチ家の系譜は、様々な登場人物により実に色鮮やかに彩られている。

その中でも、ロレンツォ・デ・メディチ（Lorenzo de' Medici 一四四九―九二）は、後に「豪華王」（ロレンツォ・イル・マニフィコLorenzo il Magnifico ＝英語では「Lorenzo the Magnificent」）の異名をとったことでもわかるように、存在の華やかさでは群を抜いていた。曾祖父、ジョヴァンニ・ディ・ビッチ（Giovanni di Bicci 一三六〇―一四二九）が銀行家として教皇庁と太いパイプを築きあげ、祖父コジモ・イル・ヴェッキオ（Cosimo il Vecchio＝英語では「Cosimo the Elder」老コジモ）ことと、コジモ・デ・メディチ（Cosimo de' Medici 一三八九―一四六四）が実質的にフィレンツェを支配するに至り、その孫、しかも長男として生まれたロレンツォは、幼い頃から帝王学をほどこされ、統治者となるべく育てられた。

ロレンツォは愚かな放蕩者ではなかった。優れた政治・外交能力を発揮し、フィレンツェの立場を優位に置きつつイタリア半島内の安定の実現に努める一方で、パトロンとしてジョヴァンニやコジモに劣らぬ情熱をもって芸術や文化の発展に寄与した。加えて、みずからも様々な才能に恵まれ、詩を作るなど粋な一面があったことでも知られる。冒頭の詩は、そのロレンツォが作ったものとして有名で、彼には見事な文才がそなわっていたことがこれでわかるという。

ロレンツォは詠う。若いということは素晴らしいが、はかない、と。彼がメディチ家の栄華の陰にしのびよる衰退の兆しを感じていたから、それを詩に反映させたのかどうか、それは定かではない。

しかし、そんなはかない人の世とは対照的に、時代を越え、幾世代を経ても輝きを失わないといえるものがある。

「美」だ。

フィレンツェの美術館に並ぶ巨匠たちの絵画や彫刻、そしてフィレンツェ中にちらばる壮麗な建築物の数々。

Quant'è bella giovinezza,
che si fugge tuttavia!
Chi vuol esser lieto, sia:
Di doman non c'è certezza.

青春は何と麗しきものか。
しかし、すぐに過ぎゆく。
楽しむのなら今のうち。
定かな明日はないゆえに。

メディチ家は一七三七年に途絶えるが、二百七十年あまりたった今も、「花の都」フィレンツェの誇る美は色あせるどころか、今日でも人々を惹きつけてやまない。芸術の持つ底知れぬ力により、人々を圧倒しているといってもいいだろう。

発展の鍵は競争心にあり

先々号の繰り返しになってしまうが、エトルリア人が拓き、古代ローマ人によって花の女神フローラにちなんで「フロレンティア」と名づけられたフィレンツェが歩んだ道は、決して平坦なものではなかった。四七六年の西ローマ帝国崩壊後、イタリア半島では戦乱が続き、フィレンツェも周辺諸国からの圧力に常にさらされることになったからだ。しかし、競争心の強いフィレンツェっ子のおかげで、商業に生き残りの道を見出したフィレンツェは着実に発展を遂げ、十二世紀後半には、その一帯（トスカーナ地方）では最も大きな力をふるう都市となる。

一一八二年には、自治都市（コムーネ）として認められ、さらに一二八二年、フィレンツェは共和国として機能するようになる。これに続き、一二九四年に布告された「正義の規定」で貴族と豪族は政治的要職につくことを一切禁じられるに至り、銀行家を含む商人による実質支配がついに実現されたのだった。

この共和制に基づく国政に参加するには、まずは組合（アルテ）に属さねばならなかった。たとえ貴族の出自であろうと、一二九四年以降はアルテに属すことが出世への第一条件となったのである。さらに、フィレンツェには七つの大アルテと十四の中・小アルテがあり、毛織物業、銀行業、医師・薬種業などが含まれる。大アルテのほうが、格が上だった。共和制とはいいながらも、やがてごく少数の有力商人による寡頭政治へと移行していくフィレンツェにあって、国政の中心に食い込むには、大アルテに属すことが必須だったことはいうまでもない。そして、有力商人として経済的に優位に立ったのは、銀行業で成功した者たちだったのだ。

その筆頭が、ご承知のとおりメディチ家である。

競争心のかたまりといっても過言ではない、フィレンツェの二百ほどもあった商家の中から十五世紀ごろより頭角をあらわし、やがてこの都市を統治するまでになるメディチ家。彼らがフィレンツェで果たした役割の大きさは計り知れないが、現在、フィレンツェが一大観光都市として絶大な人気を集めるのも、ひとえにメディチ家のおかげと断言できる。

建築・美術のパトロンとして巨額の富をつぎ込み、文化の擁護者たることは、人間にありがちな虚栄心、美への欲求を満たすことから始まったにしても、結果として多くのメリットをメディチ家にもたらした。

富める者への妬みも深いフィレンツェっ子は、絶え間なく内部抗争を繰り返していたが、気前よく芸術の振興に貢献するメディチ家というイメージの定着は、その妬みを緩和し、市民の支持を得るのにすこぶる役立った。また、メディチ家に出入りし、経済的援助を受けた知識人、学識者は、メディチ家に対して当然友好的で、彼らの意見がメディチ家に有利

パッツィ家の陰謀事件

1518年頃に描かれたとされるコジモ・デ・メディチの肖像画。鋭いまなざしなどから意思の強さが伝わってくるようだ。

西ローマ帝国が滅んでから1000年ほどたった15世紀になっても、イタリア半島の群雄割拠状態は改善されなかったばかりか、各小国の中での権力争いも依然激しかった。

フィレンツェも例外ではなく、メディチ家のコジモ・イル・ヴェッキオも、政敵であるアルビッツィ家の陰謀により、国家反逆の罪で処刑されそうになったことがある（1433年）。この時は、教皇庁、フェラーラ侯、ヴェネツィア共和国など、メディチ銀行の得意先（つまりメディチ銀行から金を融資してもらっている）である有力者から相次いで助命嘆願書が届き、フィレンツェからの追放処分で済んだのだった。翌年、アルビッツィ家が失脚、コジモはフィレンツェに戻りメディチ家による支配体制を強めるが、孫のロレンツォの代になり、これを覆そうとする勢力が再び現れる。今度はパッツィ家だった。

1478年4月26日、フィレンツェ大聖堂内でのミサの途中、フランチェスコ・デ・パッツィらがロレンツォ兄弟を襲撃。ロレンツォは負傷しながらも辛うじて逃げることに成功したが、弟のジュリアーノは絶命。引き続き、暗殺の実行者らは、反メディチを訴えて市民の支持を得ようとするが失敗。逆に捕らえられ処刑された。報復はこれにとどまらず、パッツィ家当主を含む約100名が処刑されるという陰惨な結果になった。

ロレンツォ「豪華王」の華やかな生涯とはうらはらに、メディチ銀行の衰退は既に始まっていたと見られている。

メディチ家と対立し、陰でパッツィ家をたきつけたと見られている教皇シクストゥス４世は激怒。フィレンツェを破門し、ナポリ王国とともにフィレンツェに宣戦布告する。勝ち目はないと悟ったロレンツォは意を決して単身ナポリに乗り込み、ナポリ王を説得、和睦を結ぶことに成功する。この時の外交手腕に対する評価は高く、ロレンツォはメディチ家の生んだ優れた指導者のひとりとして後世に語り継がれることになったのだった。

な世論の形成につながるなど、メディチ家は、投資にみあった見返りを得ていたと考えていいだろう。

さらに、この投資はメディチ家が絶えてからも久しく、フィレンツェを潤し続けているのである。

文化の再生を目指したルネサンス

フィレンツェを巡るにあたり、キーワードとなるのはやはり「ルネサンス」である。しかし、分かっているようで、実は説明に困るのが「ルネサンス」の特徴ともいえる。

ルネサンスは、ルネッサンスと表記されることもあるが、フランス語「Renaissance」のカタカナ読みである。十四―十六世紀のイタリアを中心に興った、「古典古代」の文化を指すだけでなく、しばしば、この運動が展開された時代をも指すとされている。後の歴史研究家がこのフランス語を使ったためにルネサンスと呼ばれるようになったが、当時のイタリアで、自分たちが行っていることを「ルネサンス」と呼んでいたわけでは当然なく、イタリア語では「rinascimento リナシメント」の語が用いられるという。

日本の世界史の時間に「文芸復興」という訳を習ったことを記憶している読者も多いだろう。ただ、「文芸」だけを対象とするのは狭すぎるとして現在、この「文芸復興」と訳すのは不適切と考えるのが一般的という。

では、「古典古代」の文化の復興とはどういうことを指すのか。

西ヨーロッパにおけるキリスト教の浸透は、古代ローマ、ギリシャの文化を否定することにつながった。ルネサンスとは、なにからなにまでキリスト教優先（キリスト教に都合の悪いことは研究できなかった）となってしまった当時の時代の閉塞感を打ち破るべく、古代ローマ、ギリシャの文献から再発見を行い、多様性を取り戻し、理性的・科学的に学問に取り組むといった、文化の再生を目指す大きな動きのことを指したといえそうだ。「いえそうだ」としか書けないのは、研究者によってルネサンスの定義が異なるためで、この項が、いまひとつ明快な内容になっていないのは、様々な研究者からの受け売りを、短く無理矢理まとめようとしているからだ。この点をあらかじめお詫びしておきたい。

さて、古代ローマ、ギリシャの文化の復興を目指したといっても、キリスト教を棄教して、多神教に戻ることを意図したわけではなかった。古代ローマ、ギリシャ時代の柔軟な精神活動を取り戻そうとしたと考えれば、多くのことに説明がつくように思う。例えば絵画や彫刻の世界でも、長らく、平面的な宗教作品（だいたい、キリスト像が中央に巨大に描かれ、遠近法や写実的表現は無視されていた）が主流だったが、ルネサンスでは、絵画も彫刻も、「生き生きとした」表現が復活、ミケランジェロやダ・ヴィンチ、ボッティチェッリの作品を思い浮かべていただければいいだろう。

息子のコジモに「政治には必要以上にかかわらないように」と遺言したジョヴァンニ・デ・ビッチ。コジモはそれに従わなかった。

商魂たくましき「花の都」

今回、取材班は二泊三日でフィレンツェを訪れたが、正直なところ、見どころを取捨選択しなければならなかった。それほどに、歴史的建造物や美術館・博物館が多い街なのだ。フィレンツェ自体はコンパクトにまとまっており、十五ページにある地図内で、例えば中央駅からヴェッキオ宮殿まで徒歩約二十分。主要な見どころは十分、歩いてまわることができる。ただ、絶景を楽しむためにぜひ訪れていただきたいミケランジェロ広場は、ヴェッキオ橋から徒歩だと三十分ほどかかるので（かなりの上り坂）、往復、あるいは行きか帰りはバスを使うと効率が良い。

この山のようにある見どころのうち、どこを訪れどのように回るか。十四・十五ページでは、「美術愛好家でなくとも、絶対に見逃せない美術品のあるポイント・ベスト4」「フィレンツェに来たら、訪れずして帰ることのできないポイント・ベスト4」「コジモ・イル・ヴェッキオゆかりの地として抑えておきたいポイント・ベスト4」など、編集部の独断によりテーマ別に分けて数案、提示してみたので参考にしていただければ幸いだ。

また、これも後述するが、観光客が集中するウッフィツィ美術館、アッカデミア美術館は予約（有料）することをぜひお勧めしたい。

なお、フィレンツェ観光を始める前に、もうひとつだけ申し上げておきたいことがある。フィレンツェが商人の都市であることは何度も言及したとおりだが、そのフィレンツェ魂は、今も健在。とにかく、どこもかしこも、入場料をかなりしっかり課される。さすがに大聖堂は無料で入場できるが、これもクーポラに上るには料金がかかる。サン・ロレンツォ教会にいたっては、内部が三つに区切られ、それぞれ入場料が必要で少々驚いたほどだが、メディチ家の「菩提寺」ならぬ「菩提教会」と聞けば、その「しっかり」度にも合点がいくというものだろうか。さらに、各観光ポイントのお土産品の充実ぶりも注目に価する。同じ美術館内にも複数のミュージアム・ショップが設置されるなどしており、ついつい散財してしまいそうになる。フィレンツェのたくましき商魂には脱帽するほかない。

しかし、ここで入場料をケチっていては、フィレンツェの魅力を堪能することは到底できない。ここは覚悟を決めて、入場料を惜しまずに街巡りに臨むのが賢明といっておこう。

メディチ家の鮮やかな退場

最後を締めくくる前に、再び話をメディチ家にもどそう。

銀行家として名と富を成したメディチ家は、その後、ロレンツォ・イル・マニフィコの息子、ジョヴァンニがレオ十世に、甥のジュリオがクレメンス七世になるなど、ついに教皇まで輩出したほか、フランス王家にも二人嫁ぎ、ヨーロッパの「名門」の仲間入りを果たす。死後に「祖国の父」という称号を送られたコジモ・イル・ヴェッキオも、メディチ家がここまで上り詰めるとは思っていなかったかもしれない。が、盛者必衰の理は、やはり容赦なく同家にも訪れる。一七三七年、メディチ出身の最後の大公となったジャン・ガストーネは世継ぎをもつことなく逝去し、メディチ家によるフィレンツェ支配もピリオドを打ったのである。

ところが、ここで一人の女性が登場する。ジャン・ガストーネの姉にして、メディチ家の血を引く最後の人物、アンナ・マリア・ルイーザだ。コジモ三世の一人娘で、一六九一年にライン選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムと結婚し、ドイツのデュッセルドルフに移り住んでいた。同侯と死別した後、フィレンツェに戻り、ピッティ宮で余生を送っていた彼女は、亡くなる前に重大な決断をする。アンナ・マリア・ルイーザの死後、ハプスブルク系のロートリンゲン家が、トスカーナ大公としてフィレンツェに乗り込んでくることは既に避けられない事実となっていた。彼女は、それを受け入れ、メディチ家が何代にも渡って収集してきたおびただしい量の国宝級の美術品、工芸品の数々を同家に譲ることを決意するが、唯一の条件をつける。

「（全コレクションの）どれひとつとして大公国の領土外に持ち出してはならない」

アンナ・マリア・ルイーザは一七四三年二月十八日、七十五年の生涯を終えるが、彼女の決断がその後、どれほどのインパクトを持つか彼女自身も真の意味では予想できていなかったのではないかと思われる。我々が現在、フィレンツェで目にする偉大なる遺産はこうしてメディチ家の最後の人物から与えられたのだ。感謝してもしきれないほどの大きな贈り物だったといえるだろう。

メディチ家直系の最後の人物、アンナ・マリーア・ルイーザ・デ・メディチ（Anna Maria Luisa de' Medici 1667年8月11日ー1743年2月18日）

フィレンツェ概略史

紀元前59年	ローマ帝国により、「フロレンティーナ」と名づけられる。
476年	西ローマ帝国崩壊。これ以降、イタリア半島は不安定な情勢が続く。
1115年	マティルデ女伯死去、フィレンツェは自治都市への歩みを開始。
1125年	ピサや宿命のライバルであるシエナなどを破り、トスカーナ地方随一の都市となる。
1182年	教皇より自治都市（コムーネ）として認められる。
1252年	フィオリーノ金貨鋳造。一時はヨーロッパの「ドル」として扱われた。
1294年	「正義の規定」により、貴族と豪族が政治的要職につくことを禁止。
1296年	大聖堂、建設開始。
1299年	ヴェッキオ宮、建設開始。
1302年	ダンテ追放、亡命先で『神曲』の執筆開始。
1350年頃	黒死病（ペスト）大流行、人口も激減。
1378年	初の本格的な労働争議といえる「チョンピの乱」勃発。
1405年	ピサを攻略、念願の港を獲得。
1434年	メディチ家のコジモ・イル・ヴェッキオ、事実上の支配者となる。
1436年	建築家ブルネッレスキ、大聖堂のクーポラを完成させる。
1469年	コジモの孫、ロレンツォ「豪華王」、当主になる。統治者として君臨。
1492年	ロレンツォ死去。
1494年	フランス王シャルル８世が侵攻、メディチ家は追放される。
1498年	「神権政治」を行ったサヴォナローラ（15ページのコラム参照）、火刑に処される。
1504年	ミケランジェロ作『ダビデ』完成。
1530年	メディチ家復権。
1569年	フィレンツェはトスカーナ大公国となり、メディチ家のコジモ、コジモ１世となる。
1737年	メディチ家断絶。
1791年	ナポレオンが侵攻。
1860年	イタリア王国に組み込まれる。
1982年	フィレンツェ歴史地区、世界遺産に登録される。

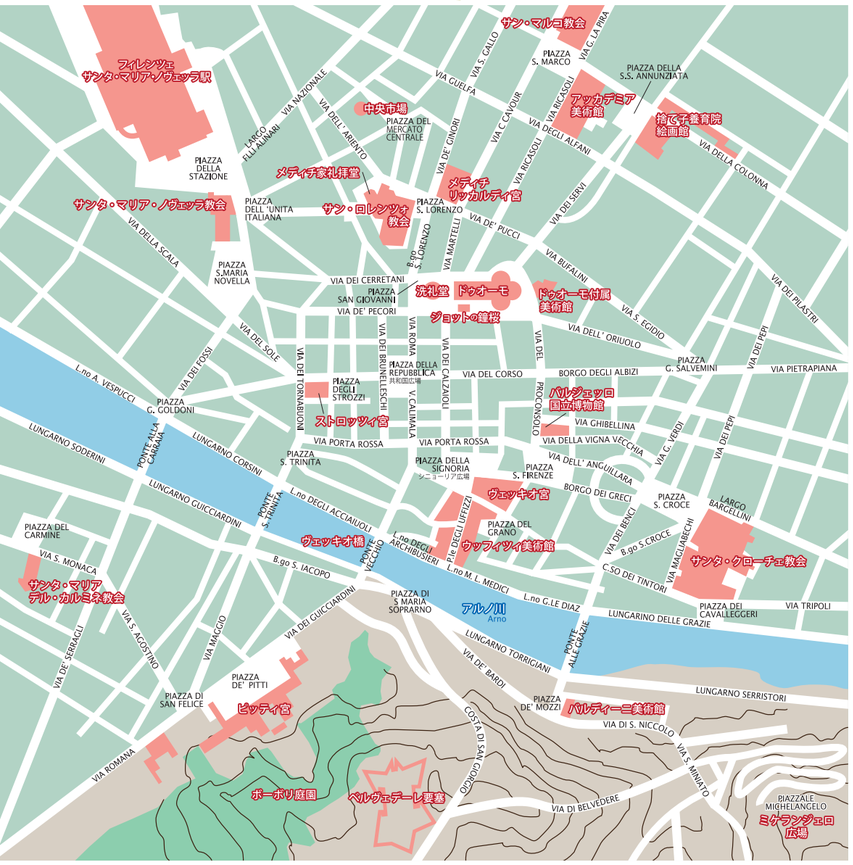
ジャーニーのクラシファイド・アドなら
お申込みからお支払いまで
オンラインでラクラク
掲載料はその場で自動計算
通常締切に間に合わなかった方のために、
Express、Super Express（追加料金がかかります）もご用意しています。
詳細・お申込みはこちらをご覧下さい。
www.japanjournals.com
ご利用頂けるカード
Switch / Maestro / Solo / Delta / Master
Visa / American Express
Japan Journals Ltd
Journey Classified Dept.

あなたのブログをジャーニーの
ホームページにリンクしませんか？
個人ブログ
大募集!!
現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としていない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。
※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。
インターネット・ジャーニー
www.japanjournals.com

フィレンツェ花のトラベル・インフォメーション

Special thanks to: Italian State Tourist Board, Florence Tourist Board

※情報は2010年8月10日現在のもの



開館時間について

紙面が限られていることから、開館時間についての情報は割愛せざるを得なかった点、ここにお断りしておきたい。現地でガッカリ…ということを避けるためにも、事前にフィレンツェ観光局のオフィシャルサイトで確認されることを強くお薦めする。

www.firenzeturismo.it/en/monumenti-musei-firenze/

このページ＝写真＝の右隅のほうに「download」できる資料が各種用意されている。旅行プランを立てる際にご活用を。

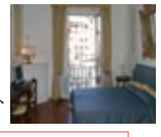
美術館の予約について

フィレンツェの美術館の多くは事前予約ができるようになっている（たくましい商魂と、時間が惜しい観光客の要望が合致！）。ウッフィツィ美術館については、夏場ともなると２時間待ちのケースもあるほど。１人４ユーロ余計にかかるが、ウッフィツィ美術館とアッカデミア美術館に関しては、事前予約をしておいたことを心から感謝することになるだろう。電話予約055 294 883、またはオンラインなら次の要領で。❶www.firenzemusei.it/のサイトにアクセスし、トップページの左の方にある青いロゴ近辺をクリック（「Welcome」の文字をクリックしても次の画面に移れないので注意）。❷「Sign up」をクリックして登録。住所に関し、国名はすべてイタリア語になっているので英国なら「Regno Unitos」を選択（ちなみに日本は「Giappone」）。❸後は指示に従っていけば予約できる。なお、「Polo Museale Fiorentino」は「フィレンツェ美術関連複合施設」くらいの意味。❹予約番号が入手できたら（この時点では料金はとられない）、指定時刻の５～10分前に美術館の入り口に行き、係員とおぼしき人にどこに並べばいいか聞くこと。❺実際の入場時に、入場料＋４ユーロ（美術館によっては３ユーロ）をあわせて支払う。

フィレンツェへの行き方について

市内まで列車で約１時間というフィレンツェ空港は小規模。大型旅客機は発着できないため、ロンドンからアリタリア航空を使うと、ローマやミラノ乗換えとなる（ここで小型機に乗り換え）。ガトウィック空港からはメリディアナ航空の直行便があるものの、便利な時間帯のフライトは高額に設定されているのが普通。ここで別ルートとして考慮してみていただきたいのが、ローマまたはミラノで列車に乗り換え、フィレンツェに向かう方法。ローマやミラノで飛行機を乗り換える際の時間のロスを考えると、時間的にはほとんど変わらないが、早く到着することもある。ただ、チケットはwww.italiarail/comで事前に購入するのがお薦め。イタリアの駅の行列は長い！ もし現地で購入するなら自動販売機にトライすべきだが、英語モードにしていても曜日などがイタリア語で表示される…。素直に周りの人に助けを求めるのが得策。

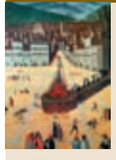
ホテルについて



一大観光都市だけあり、ホテルの数も種類も充実。今回、取材班が利用した、ホリデー・フラット形式の宿泊施設を選ぶのも一案。部屋によっては、シニョーリア広場を見下ろす絶好のロケーションのものもあり、きわめて便利かつ快適。

Special thanks to :
Residenza d'Epoca, Bed and Breakfast in Florence
住　所：Piazza della Signoria - Via dei Magazzini, 2 - 50122 Florence
Tel: 055 2399546　www.inpiazzadellasignoria.com

怪僧か、宗教改革の先駆者か？
火刑に処されたサヴォナローラ



サヴォナローラは、サン・マルコ修道院の修道院長となった人物で、メディチ家による独裁とそれがもたらす腐敗を激しく批判。ロレンツォの死後、メディチ家の失政も追い風となり、市民からの圧倒的な支持を受け、メディチ家を追放し神権政治を行うまでに至った。しかし、ぜいたく品として美術品や工芸品などを広場に集めて燃やすなど、厳しい禁欲生活を市民に強いたことから、やがて市民の反発は憎悪へと形を変え、ついには逮捕されてしまう。拷問の末、絞首刑のちに火刑に処され、灰はアルノ川に捨てられた。

余力があれば…
ぜひ訪れておきたいポイント

ヴェッキオ橋
Ponte Vecchio

シニョーリア広場からピッティ宮へ向かう途中にある「古い橋」。両脇に、フィレンツェの特産品である金銀細工を扱う貴金属店がずらりと並ぶ。価格比較を十分に行ってから、ご購入を。

サンタ・クローチェ教会
Basilica di Santa Croce

住　所：Piazza S. Croce

1442年に完成。フィレンツェの名門のひとつ、パッツィ家の礼拝堂（ブルネッレスキ設計）とサンタ・クローチェ付属美術館で知られる。

サンタ・マリア・ノヴェッラ教会
Chiesa di Santa Maria Novella

住　所：Piazza S. Maria Novella

1439年に、フェラーラに代わりフィレンツェで行われた、キリスト教にまつわる問題を討議する「公会議」の会場となった教会。15世紀に完成。中にはサンタ・マリア・ノヴェッラ宗教美術館も有する。

捨て子養育院絵画館
Galleria dello Spedale degli Innocenti

住　所：Piazza SS. Annunziata 12

15世紀に、ブルネッレスキの設計により建てられた、シングル・マザーのための施設。内部は美術館になっている。

フィレンツェ食事情

とにかく肉、肉、肉！

今回のフィレンツェ取材中、出会ったのはほとんど肉料理ばかり。これだけ流通が発達しても、フィレンツェっ子の「肉好き」傾向に変化はなしというところなのだろう。最も有名なのはTボーン・ステーキ＝写真上。宿泊先のホテルで、「このあたりで、美味しい『Bistecca alla fiorentina』（ビステッカ・アッラ・フィオレンティーナ）が食べられるレストランを教えてください」と聞けば１～２軒は教えてもらえるはず。注文は２人前から、１人当たり25ユーロ前後が相場の模様。とにかく肉厚で巨大！

中央市場で地元料理を！

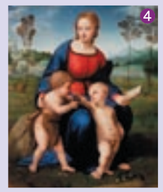
フィレンツェを案内してくれたガイドさんに教えてもらったのが中央市場にある食堂。メインの入り口から入ると右手奥に２軒並んでいるが、よりお薦めなのは1872年創業という「Nerbone」。美味しい分、列が長く待たされるがガマンガマン。店の正面に向かって左側のカウンターでまず注文して料金を払い、パスタやリゾットはすぐその右側で受け取る（レシートを差し出す）。サンドイッチ類は、さらにその右側のカウンターで受け取る。ぜひ試していただきたいのは、牛の胃袋（正確には第二胃、日本語名「ハチノス」）であるトリッパ（trippa）。くさみを抜きながらやわらかくなるまでゆでて、ガーリックをはじめとする香辛料のたっぷり利いたソースをかける。イタリア北部でよく見られる料理とのこと。

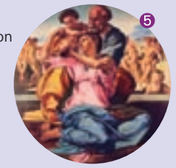
美術愛好家でなくとも 絶対に見逃せない美術品のあるポイント　ベスト4

ウッフィツィ美術館
Galleria degli Uffizi

住　所：P.le degli Uffizi 6
入館料：10ユーロ、月曜休み

「ウッフィツィ」とは英語の「オフィス」にあたる。かつて、ここにフィレンツェ大公国の行政局（オフィス）が置かれていたことから、この名がついた。初代トスカーナ大公コジモ１世の時代に、ジョルジョ・ヴァザーリの設計で建てられ1580年に完成。展示品の数は2,500、見学には最低半日かかるともいわれるが、そこまで時間は割けない、という人に強引かつ独断に基づいて選ぶとすれば次の５点。





❶サンドロ・ボッティチェッリ
『ヴィーナスの誕生』
The Birth of Venus
❷ダ・ヴィンチ
『受胎告知』The Annunciation
❸ボッティチェッリ
『春』Primavera
❹ラファエロ
『ヒワの聖母』
Madonna of the Goldfinch
❺ミケランジェロ
『聖家族』The Doni Tondo

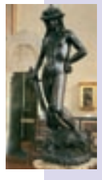
アッカデミア美術館
Galleria dell' Accademia

住　所：Via Ricasoli 60
入館料：10ユーロ、月曜休み

©Rico Heil

ウッフィツィ美術館に比べると、こぢんまりとしているが、ミケランジェロの彫刻、フィレンツェ派絵画を集めた美術館として観光客からの人気も高い。ここの「目玉」的作品は文句なく、ミケランジェロの『ダビデ像』Davide（1504年完成）＝写真。背後にまわると、投石用具をたすきがけにしているのが分かる。右手に握りしめているのは、石つぶて。ダビデは自由と独立のシンボルとされており、シニョーリア広場とミケランジェロ広場に複製（サイズは異なる）が置かれている。

バルジェッロ国立博物館
Museo Nazionale del Bargello



住　所：Via del Proconsolo 4
入館料：４ユーロ、月曜休み

起源は13世紀末という建物で、1574年に警察長官の館＝バルジェッロとして使われるようになったことから、この名がある。コジモ・イル・ヴェッキオのお気に入りだった彫刻家ドナテッロの『ダビデ』（ミケランジェロのダビデとは全く異なる。こちらはユダヤ王）＝写真＝など、絵画、彫刻から、メディチ家ゆかりの武具まで幅広く展示されている。

サンタ・マリア・カルミネ教会
Chiesa Santa Maria del Carmine

住　所：Piazza del Carmine 2
入場料：４ユーロ、火曜休み

1268年に建てられてから1775年の大改築まで様々な改装・改修が施されてきた。一番の見どころは「ブランカッチ礼拝堂」（Cappella Brancacci ）。27歳の若さで逝去した、ルネサンス初期の天才画家、マサッチオ（Masaccio, 1401年 - 28年、マザッチョとも表記される）の『貢の銭』（Tribute Money）＝写真＝などのフレスコ画が描かれている。

フィレンツェに来たら 訪れずして帰ることのできないポイント　ベスト4

フィレンツェ大聖堂（ドゥオーモ）
Santa Maria del Fiore (Cattedrale)

住　所：Piazza del Duomo

正式には「花の聖母マリア大聖堂」という、フィレンツェのシンボル的存在。1296年から工事が始まり、約140年でほぼ完成した（外装が完了したのは1887年）。白、緑、ピンクの大理石が組み合わされた華やかな外壁、ルネサンス初期を代表する建築家、ブルネッレスキ（大聖堂の地下に墓所がある）の設計による大クーポラ（ドーム型の屋根）など、「花の」という言葉が正式名称につくのもうなずける。中は予想外にシンプルで、厳かさが強調されている気がした。なお、大聖堂はフィレンツェでは入場料が課されない数少ない見どころのひとつだが、クーポラの上まで登るのは有料（８ユーロ、日曜は登れないので注意）。463段を登りきると、絶景が広がる。

ミケランジェロ広場から望む大聖堂のクーポラ（右）とジョットの鐘楼。思わずうっとりと見入ってしまった。

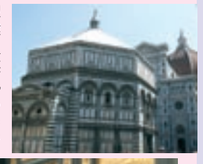
ジョットの鐘楼
Campanile di Giotto

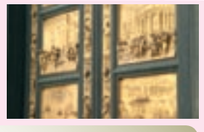
住　所：Piazza del Duomo
入場料：6ユーロ、毎日オープン

大聖堂に隣接し、ひときわ高くそびえるのがこの鐘楼。高さ84メートル、ゴシック期に活躍した画家・彫刻家・建築家のジョット・ディ・ボンドーネ（Giotto di Bondone, 1267年頃 - 1337年）が設計、1359年に完成した。414段の階段を登りつめれば、大聖堂のクーポラを入れ込んで、フィレンツェの町並みを写真に撮ることができる。ただ、大聖堂のクーポラとこの鐘楼を、立て続けに制覇するのはかなりの重労働。

聖ジョヴァンニ礼拝堂
Battistero di San Giovanni

住　所：Piazza del Duomo
入場料：6ユーロ、毎日オープン





ドゥオーモ広場にあり、大聖堂の隣に位置する八角形の建物。フィレンツェの守護聖人ジョヴァンニ（聖ヨハネ、英語ではJohn）に捧げられた礼拝堂だ。大聖堂ができあがるまでは、ここが宗教の中心だった。中に入ると、天井のモザイクの絢爛豪華さに目を見張る。出入り口のひとつ、東の扉＝写真＝はギベルティ作でミケランジェロが「天国の扉」と称したことでも知られる。

ヴェッキオ宮
Palazzo Vecchio

住　所：Piazza della Signoria
入場料：6ユーロ、毎日オープン

1299年に建設が始まり、以降、増改築が幾度も行われた。1565年にコジモ１世が、宮殿をピッティ宮に移してから、「ヴェッキオ＝古い」宮と呼ばれるようになったという。フィレンツェがイタリア王国の首都だった時代、1865年から５年間、国会がここで開かれた。現在は市役所となっている。なお、このヴェッキオ宮の足元に広がるシニョーリア広場には、ミケランジェロのダビデ像のコピー、ネプチューンの噴水があるほか、ジロラモ・サヴォナローラ（Girolamo Savonarola 1452年 - 98年）＝左ページのコラム参照＝が火刑に処された場所を示すプラークも置かれている。

コジモ・イル・ヴェッキオ ゆかりの地として抑えておきたいポイント　ベスト4

メディチ・リッカルディ宮
Palazzo Medici Riccardi

住　所：Via Cavour 3
入場料：7ユーロ、水曜休み

コジモ・イル・ヴェッキオが、フィレンツェ出身の建築家、ミケロッツィに設計を任せた自邸。1659年、リッカルディ家に売却されたため、メディチ・リッカルディ宮と呼ばれる。人の妬みの恐ろしさを知っていたコジモはできるだけ質素に見えるように、とミケロッツィに命じたという（当初、設計にあたるはずだったブルネッレスキのモデルは豪奢すぎて却下された）。現在は県庁として使われている。「東方三博士の礼拝堂」（Cappella dei Magi）の壁に描かれた、ゴッツォリ作のフレスコ画『東方三博士の騎馬行列』（the Procession of the Magi）＝写真＝は必見。

サン・マルコ教会（美術館）
Museo di San Marco

住　所：Piazza S.Marco 3
入場料：4ユーロ、月曜休み

聖書では、金貸し業、銀行業はすべて禁じられていたため、銀行業に携わる商人たちは、常に罪の意識があったといわれている。裕福な商人が頻繁に宗教画を描かせたり、教会や修道院に寄進したりしたのはそのため。このサン・マルコ教会（修道院付）についても同様で、罪の許しを求めたコジモに対し、時の教皇が「１万フィオリーニ（金貨）を寄進し、（同修道院を）改修すれば許す」と返答。コジモはその４倍の４万フィオリーニを寄付したという。敬虔な修道士として知られる「天使のような修道士」＝フラ・アンジェリコ（Fra Angelico 1387年 - 1455年）の『受胎告知』（The Annunciation）＝写真＝などが有名。なお、余談だが、ルネサンス時代の画家として、フラ・アンジェリコの対極にあるような人物がフィリッポ・リッピ（Fra Filippo Lippi 1406年 - 69年）。リッピは複数の女性と浮名を流し、やがて修道女との間に子供までもうけたつわもの。しかし、画家としての腕は確かで、ボッティチェッリは彼の弟子だった。

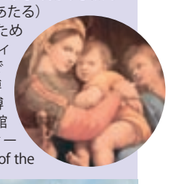
サン・ロレンツォ教会
Basilica di San Lorenzo

©Tubantia

住　所：Piazza di San Lorenzo

４世紀ごろに建てられた教会を、まずは1059年に再建。さらに1418年に、メディチ家礼拝堂（Cappelle Medicee）を設けることを条件にメディチ家が先頭にたって寄進、ブルネッレスキの設計により完全な建て直しが行われた。外観は1461年に完成したものの、内装はその後、断続的に整えられることになった。コジモの墓所があるほか、ミケランジェロが設計した「新聖具室」（La Sagrestia Nuova）など見ごたえがある。

ピッティ宮
Palazzo Pitti

住　所：Piazza Pitti 1
入場料：10ユーロ、月曜休み

15世紀にメディチ家に対抗心を燃やすピッティ家によって建てられたが、ピッティ家の没落を受け、1549年にコジモ１世（コジモ・イル・ヴェッキオの弟のひ孫の子にあたる）が妻、エレオノーラ・ディ・トレドのために購入し、ヴェッキオ宮からこのピッティ宮に宮廷を移した。王家の居室が見学できるほか、内部には近代美術館、銀器博物館、磁気博物館、馬車博物館、衣装博物館、そして名高いパラティーナ美術館（Galleria Palatina）がある。このパラティーナ美術館は、『椅子の聖母』（Madonna of the Chair）＝写真右＝をはじめとする、ラファエロの名作が揃っていることで知られている。また、裏手にある広大なボーボリ庭園＝同下＝も、時間が許す限り散策したい場所だ。